

## 「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部4年 栢野ななせ

本プログラムでは、日比間における人の国際移動を主なテーマとした2018年度前期の社会学特殊講義を履修し、かつ京都市内の小中学校で日比両国にルーツを持つ子供たち(Japanese-Filipino Children: JFC)の学習を支援するボランティアを毎週行ってきた学生・院生計6人が、実際にフィリピン共和国に渡航して、JFCを含む日比間の諸問題やフィリピン国内の実情を様々な角度から見つめ考察を深めた。現地では、政府機関のインターンシップへの参加や、NGOや学校、福祉施設や関係者らへの訪問を行った。訪問先では積極的にディスカッションや質疑応答へ参加し、空き時間には参加者同士でミーティングし意見交換するなど、各々が滞在期間をフルに活用して密度の濃い理解を目指した。また参加者は渡航前より、自らの学習支援の経験に基づいた内容で一人当たり五分間の英語によるプレゼンテーションを準備し、フィリピン政府在外フィリピン人委員会(Commission on Filipinos Overseas: CFO)において、日本への結婚移民らとCFO職員を対象に計二回の発表を実施した。

「ここは、何でもあり、といったような場所ですから」。マニラの旧繁華街・マラテで、現地滞在中私たちをアテンドしてくださった元フィリピン人女性タレントのプロモーターの男性は、街をそのように言い表した。研修を終えた今、その印象はフィリピンで見たり聞いたりした全てに当てはまっていたように思う。同じマニラ市内で、乗車しているタクシーのドアを叩いて物乞いを目で訴えるストリートチルドレンや道端に寝転ぶ路上生活者に出会えば、巨大カジノリゾートやアジア最大級と言われるショッピングモールの絢爛さに目を奪われもした。一言でまとめるなら「混沌」、アジアのみならず世界の経済大国との関係の中であらゆる利権や思惑が交錯するもとの、それぞれのフィリピンの人々の生活があるということ、街を眺めながらひしひしと感じられた。

一つの社会問題を、様々な関係者の話を聞くことにより多方面から見るとつけても、そうした複雑さは垣間見えた。例えば、1980~90年代に興行ビザで来日したフィリピン人女性タレント本人らと、彼女らを送り出したフィリピン国内のエージェンシー、エージェンシーと日本の店をつないだプロモーターのそれぞれに話を聞く機会があった。立場の違いは主張の違いを生む。エージェンシーやプロモーター側は、日本にフィリピン人女性を送り出し職に就かせたことで、彼女らの生活を助けた側面があったのだと語った。その一方で、同時に日本人男性との間に生まれたJFCの子供をフィリピン帰国後も育てているが、日本にいるはずの父親が何度捜しても見つからないのだ、とこぼす元タレントの女性が、何とも形容しがたい哀しげな表情をしていたのは忘れられない。

知見を広げるほどに、諸社会問題の根深さをいっそう覚え気が遠くなり、またこの一週間だけ実情を垣間見たところで自分は何を理解できたというのか、今後一体何をできるのかという強い無力感に苛まれた。しかし同時に、人々と交流して感情に触れたり共に笑ったりするうちに、なんとなく遠く異次元の話だと感じていた彼らの生活も自分の暮らしと地続きであったのだという、手触り感とでも言うべき実感も得た。だからこそ今は、今後も何らかの形で彼らに関わり続けていきたいと思っている。とりあえずは研修参加要件であったために始めたJFCの学習支援を、これからは自分の意思で続けていくつもりである。また、来年度から記者としての就職が内定している自分にとって果たすべき役割は、苦しんだり辛い思いをしたりすることを強いられていても目の前の暮らしを営むことで精いっぱい、自身で行動を起こして状況改善を目指すのは困難という人々にとって代わり、その状況を世に周知し訴えかけ続けていくことであると、研修を経て思い至った。今回の渡航をもってゴールとするのではなく、今後の生き方の指針としたい。そう考えるに至ったフィリピン研修への参加は、自分にとって非常に意義深い経験であったと確信している。最後に、安里先生と学生のアシストをしてくださったMarilouさん、現地でお世話になった全ての方々のお陰で、この機会の他ではできない実り多い学びをさせていただけたと痛感しています。さらに、二つの強力な台風に見舞われ、出発前には関西空港への被害の影響で研修中止すら覚悟し、現地到着後も直前の予定変更が相次ぐ状況であった中、各方面で調整を続けていただいた皆様のお陰で、参加者全員が全日程を滞りなく修了できたことを非常に有り難く感じています。多数のご厚意・ご尽力にこの場を借りてお礼申し上げます。